

質的研究方法について考える

— グラウンデッド・セオリー・アプローチ、ナラティブ分析、アクションリサーチを中心として¹ —

A Comparison of Three Qualitative Research Methods:
Grounded Theory Approach, Narrative Analysis, and Action Research

灘光洋子 浅井亜紀子 小柳志津

Yoko NADAMITSU Akiko ASAI Shizu KOYANAGI

Abstract: The objective of this paper is to compare and contrast three important qualitative research methods: grounded theory approach (GTA), narrative analysis, and action research. All three methods share a similar philosophical basis that emphasizes human subjectivity, socially constructed reality through language, and meaning created through interaction. In detail, however, each of the methods has been implemented in various ways. Three versions of GTA are discussed here. The Glaser & Strauss version presents detailed, step-by-step procedures to ensure the validity of data analysis, whereas Charmaz's approach to data is more interpretive. Kinoshita extensively modified the Glaser & Strauss version of data coding. Narrative analysis has defined and understood narrative in different ways in different fields. This paper describes how narrative analysis is used to understand the themes and the structure of narrative as well as the meaning generated through interactions. The construction of reality through narrative is also explored. Action research requires an understanding of the researcher's involvement in the research. Research involvement and the change the researcher brings through action are reviewed. The similarities and differences between the three methods are delineated to help researchers choose an appropriate method in pursuit of their research question. The paper should also help researchers understand the importance of their positioning toward their participants in qualitative research.

1. はじめに

質的研究は論理実証主義への批判から生まれた。合理的パラダイムが前提とする唯一かつ普遍的真理への懐疑、研究者の価値中立性や客観性を所与の条件とする研究姿勢への疑問、現実を因子に細分化しそれらの相関関係をみようとする（量的研究方法）で逆に捨象されてしまうものへの視点などに応える知的枠組みとしてとらえることができよう。質的研究は異文化コミュニケーション分野でも最近増えてきているが、小論では、とくに、グラウンデッド・セオリー・アプローチ（GTA）、ナラティブ分析、アクションリサーチを取り上げる。異文化コミュニケーション研究でよく用いられている GTA だが、そこには多様なヴァージョンが存在する。ナラティブ分析では概念のとらえ方によって異なるアプローチがみられ、その実践にはわかりにくさが伴う。また、アクションリサーチは有用な研究方法として最近注目されてきているが、まだ十分に活用されているとは言い難い。それぞれの特徴、一枚岩ではない現状、分析手順、検討すべき点などについて概観したい。

2. グラウンデッド・セオリー・アプローチ

質的研究方法の中でも、近年多くの研究者が採用しているのがグラウンデッド・セオリー・アプローチ（GTA）であろう。GTAの原理を一言でいえば、データに接地し根差した理論を生成するための方法、である。グレイザーとストラウスが1960年代に提唱し *The discovery of grounded theory* (Glaser & Strauss, 1967) で著された GTA であるが、その後、ストラウスとコービンが GTA に関して *Basics of qualitative research* (Strauss & Corbin, 1990) を書き、それに対してグレイザーが反論を出したことで、元々 GTA がもっていたあいまいさが表面化して解釈の幅を生むことになった。そのため、約半世紀近くが経った今、考え方や手順はかなり多様化している。本章ではまず GTA の特徴と手順の概要を示し、派生形とそれらの視座や手順の違いを述べたい。

(1) グラウンデッド・セオリー・アプローチの特徴

GTA の特徴の第一は、仮説生成を目指すことにある。おもにインタビューで収集したデータを詳細に分析し、その中から“理論”を見つけ出していくことで、GTA の最大の強みとなる仮説の生成が可能となる。ここでの“理論”とは、認識論やメタ理論というような大局を統括するものではなく、ある事象に共通して述べることができる“説”である。つまり、内容豊富で詳細なデータを適切に分析することにより、その中に貫かれる一つの理論として科学的に説明できると考える。質的研究では、多数の対象者のデータを収集して分析することは非常に困難であり、分析時に研究者の主観が入り恣意性が拭えないため、分析から得られた理論を一般化するには限界があると批判されることもある。質的研究の中には、一般化を目的としないものもあるが、GTA ではデータの分析方法を厳密に示し、説の根拠となるデータを適切に示すことにより、論の妥当性と信頼性を得ようとしている。

一方で、インタビューなどでデータを収集し、それらを一つ一つ分析し解釈していくという作業は、かなりの手間と時間がかかる。量的研究のように数百人規模でのデータ収集や分析は不可能に近い。したがって、多くの対象者からデータを取り仮説を検証することを目的とした研究には不適切となる。

GTAの第二の特徴は、データ分析の手順が明確に示されていることである。手順の詳細はGTAの派生版により異なるが、データをコーディングしカテゴリー化し、そこから理論を導き出すための方法が具体的に示されている。このように分析手順を明確に具体的にしたことにより、それまで研究者の“職人技”や恣意的作業のようにみられていた質的研究が、誰にでも分析可能で科学的手法に基づいて行われている、と理解されるようになった。この点が他の質的分析法と大きく異なるといえる。

しかし、データを細分化しステップごとの手順を踏むことに専念して、それで分析ができたと思っ込んでしまうと、対象者が話していることやコンテキストの意味を見失いかねない。さらに、手順に縛られて分析自体が形骸化してしまう恐れがある。客観性を確保するための手順であるが、インタビュー・データがもつ豊富な情報を生かせなくなってしまうのは元も子もなくなってしまうのである。

第三の特徴として、人の内面を調査するのに適していることがあげられる。インタビューによって、対象者が事象をどのように解釈しているかを研究者が理解することに力点が置かれている。GTAは、考案者達の研究背景から看護学系の分析に使われることが多いが、今では質的分析を行う社会学や心理学でも広く使われている。

(2) グラウンデッド・セオリー・アプローチの分析手順

GTAの特徴や視座をより適切に理解するために、ここでGTAが一般的に提唱している分析の手順をまとめる。細かい分析手順が示されていることがGTAの特徴だが、ハウツウ的なやり方の詳細は、ここでは字数が限られ説明できないため、数多くある他の書物（シャーマズ、2008；木下、2003など）に譲るが、GTAの流れと手法の名称を示したい。

まず初めに調査にあたってのリサーチ・クエスチョンを立てる。つぎに、リサーチ・クエスチョンに合わせてデータを収集する。これは半構造化面接によることが多い。データを数件収集後、データ全体を読み込み、コーディングの作業を始める。コーディングとは、長大なインタビュー・データを細かく分け（切片化）、単語や箇条書きのレベルにし、そこから要点のレベルへと抽象度をあげてデータを要約するイメージで考えるとわかり易いだろう。次の段階はカテゴリー化と呼ばれ、多様に出現したコードから共通性や理論の核となるような概念を見つけ出す作業を行う。GTAにおけるコーディングやカテゴリー化は、量的分析でいうところの、関連する変数とその値や種類（たとえば、性別という変数と、男・女という種類）を見つけ出す作業であるといえる。データの中から変数を見つけ出すという意味でGTAは仮説生成型である。

一般的に、GTAの手順では数件のデータ収集後にこれら作業を行い、再びデータ収集に戻ってデータの蓄積を行うこととされる。データ収集と分析を螺旋状に行うことで、より理論に適切なデータが収集でき理論が精緻化できると考えられている。

しかしながら、これら分析の手続きはGTAを基としながらも派生したさまざまなバージョンによって、現在かなりの違いが生まれてきている。加えて、コーディングやカテゴリー化にあたってはデータの意味を調査者が“理解”し抽象度を上げるのだが、その“理解の仕方”も研究者の認識論的立場を反映して多様化してきている。次章では、GTAの歴史的流れを追いながら、各派生形の視座や手法の違いを説明していく。

(3) グラウンデッド・セオリー・アプローチの派生形とそれらの視座

さまざまな派生が生まれた理由は、初期のグレイザーとストラウスの提唱に明確にされていな

かった部分が多く（木下，1999）、彼らが研究者に対して「自分なりの方法で柔軟に使用するよう勤めて」（シャーマズ，2008，p.13）いるためであろう。GTAの派生はいくつかあるが、依って立つ視座や分析方法の違いから大別して、ここでは三つをあげる。

一つはグレイザーとストラウスによるオリジナル版で、ストラウスの下で長く指導を受けた木下（2008）は、これに沿って非常に細かく段階を踏んだコーディングやカテゴリー化を行う分析手法を踏襲している。オリジナル版では、木下（1999）が指摘するように彼らの認識論的立場は明記されていないが、質的データを研究者が理論化する過程でいかにその解釈に妥当性があるかを示すことに注力しており、理論がデータにより“実証”されていることを重視している。

実証することが命題であったオリジナル版では、研究者の意図的解釈が入り込む余地がないようにデータを切片化し、文脈から切り離して客観性や中立性を確保しようと努めている。コーディングも1文ずつ行い細かくラベルを付けカテゴリー化へと進め、そういった細かい作業を提示することで分析の妥当性を示している。

これは、GTAが形成された時代背景に大きく影響を受けている。すなわち、実証主義が当然とされていた学問の世界では、仮説検証型の量的分析が主流であり、質的分析の意味や価値も認められていなかったため、科学的研究としての信頼を得るためには質的分析で“実証”できていることを示すのが最重要課題であったのだろう。

しかし、元来GTAは実証主義的な視座をグレイザーがもちつつ、一方でストラウスは解釈論的なシンボリック相互作用論²に依拠していた、とシャーマズ（2008）は指摘している。実際、GTAの手法や質的分析の考え方は、解釈主義の視点から説明したほうが理解しやすい。複数の被調査者の発したインタビュー・データを調査者が分析するためには、各々のデータが意味することを調査者が解釈しなければならない。また、それ以前に、近年の質的分析における主要な認識では、被調査者たち自身が自ら社会との関わりの中で意味を見出し、事象を解釈していると考えられる。

この見方を発展させたのが、シャーマズが提唱する社会構成主義版³GTAである。シャーマズは「どのような理論的表現も、研究対象となる世界の解釈的な描写であり、そのありのままの像ではないという明確な前提」（2008，p.14）をもって、研究分析は現実を構成する、という立場である。したがって、社会構成主義版ではコーディングやカテゴリー化の作業は適宜行うこととし、データそのものに分析者の解釈を加えたレベルでコーディングが行われている。

三つ目は、グレイザーとストラウスの方法を詳細に分析し、方法論的問題点を指摘して改良を加えた、木下（1999，2003）の修正版GTA（M-GTA）である。木下はM-GTA自体の認識論を明示していないが、グレイザーとストラウスの認識論的差異を指摘しながら、「私はストラウス版を基盤にする」（1999，p.143）と述べるように、シンボリック相互作用論に近いところにあると推察できる。M-GTAではコーディングの作業が大幅に見直され、文脈の中での意味の解釈を重要視するために切片化はせず、抽象度を上げ概念生成を進めるための手段として分析ワークシートを導入している。

これら三つのバージョンの他にも、日本語による質的分析法の書物でGTAに分類できるものも多い。GTAとは銘打っていないが、手続きや用語が非常に近い佐藤（2008）の質的データ分析法や、構造構成主義を認識論とし、M-GTMの分析ワークシートを使う西條（2007）も、GTAを分析手法としていいだろう。

このように、GTAを取り巻く学問的環境は創成期とは大きく変化しており、現在のGTAでは、社会構成主義やシンボリック相互作用論の認識論に依拠することで、分析方法としてより発展し

ているといえる。

(4) グラウンデッド・セオリー・アプローチの注意点

社会科学的研究を取り巻く時代背景の推移もあって、GTAはさまざまな派生ができ、依って立つ認識論も微妙に異なっている。これは質的分析に熟達してはいないがGTAを使おうと考える研究者にとって厄介な問題である。どのバージョンを使うべきか、使えるのか、研究方法として単に「GTAによる分析」と明記してよいものなのか、たいへん悩ましい。

派生の問題に加えて、本稿ではGTA一般に共通する注意点について述べたい。GTAは「質的分析方法」とされ、ストラウスとコービンの書のタイトルも*Basics of qualitative research*となっではいるが、GTAは質的分析の全体を網羅しているわけではない。極端な言い方をすれば、GTAは研究方法というより、「集めてきた質的データの処理方法」である。データの分析過程や処理方法に力点が置かれ過ぎており、どのようにリサーチ・クエスチョンを立てるべきか、どのように質問項目を設定すべきか、どのようにデータ収集を行うべきかなど、収集したデータを目の前に置くより前の段階にはほとんどふれられていない。多少、文献レビューや問の立て方に言及はしているが、あまりに概論的で方法を示すものではない。

これはデータ分析の前に仮説や推論は立てず、収集したデータの中から仮説を導き出す、というGTAの考え方に基づくと思われるが、これにより大きな問題が生まれる。第一に、分析前のやり方が示されていないのでデータ収集が適切にできないという点である。明らかにしたいことは何か、そのために何をどのように聞くべきか、どんなデータが必要か、という基本的事項を明確にもっていないと、分析に値するデータ自体が取れない。基になるデータの中に明らかにしたい内容が含まれていなければ、いくら分析方法を理解したとしても、実のある調査にはならない。

第二に、仮説をもたずに分析に向き合うということが曲解されている点である。質的調査は仮説検証を目的としないのがほとんどなので、きっちりとした仮説を最初に立てることは不適切であり、仮説という名の思い込みでデータを収集して分析すれば、意図的な調査でしかなくなってしまうことは明らかである。しかし、仮説をもたないというのは思い込みに引きずられないということであって、研究対象や事象、関係要因について深く考えないということではない。実際、研究者が仮説や推論、ある種の予測をまったくもたずに調査を始めることは不可能だろう。研究者は何か疑問をもち、どのようなことが関係しているのか、何が問題なのかを常に考えているはずである。

これは第一の問題とも関わるが、このように常に考えを巡らせ、関係ありそうな点にある程度見当をつけておくことで、質問項目が見えてくるのであるし、その結果、適切な概念が浮かび上がり理論化が行えるようになると筆者は考える。関係のありそうな要因を常に頭に置いて半構造化面接を行わなければ、相手の回答に対しより深い質問をすることはできず、表面的な話を集めるだけとなってしまうがちだ。それではたとえ100人にインタビューを行い、いくらGTAに基づき詳細なコーディングやカテゴリー化を行っても、全体を説明できる概念は浮かび上がってこない。

このように、GTAで分析する場合には、解明したいことに関与する内容を豊富に含んだ適切なデータを収集することが非常に重要である。GTAはデータ収集を数件行い、その後分析をしてまた収集に戻る、というやり方を提唱することでこの点を担保しようとしていると思われる。しかし、実際の質的研究を考えた場合、研究者は疑問が起きている現場（フィールド）に密接に関わっていることがほとんどである。もし初めて入るフィールドであるなら、いきなり面接でデ

ータ収集を行うのではなく、参与観察や予備調査などで状況のある程度把握しておくのが“研究者”ではないだろうか。「とりあえず聞きます」では面接に参加してくれる人に対して失礼であり、調査とはいえない。GTAを使った研究を行うのであれば、調査事象に対して深い洞察をもち、どうすれば情報の豊富なデータが収集できるかを検討し、被調査者のさまざまな発言を掘り下げ概念を掘り出す柔軟性をもって調査を開始すべきであろう。

3. ナラティブ分析

ナラティブ研究は質的研究のひとつで、初期には、自らの語りを用いて、抽象的な概念を説明しようとしたが、最近では、「解放と共感」（現実に対する代替案を生み出したたり、他者を理解しようとするもの）という目的を強調したものもある（ガーゲン, 2004）。ナラティブが用いられる範囲は広く、社会言語学的分析（発話の構造分析など）、心理学的分析（カウンセリングのナラティブ・セラピーなど）、文化人類学的分析（ライフ・ヒストリー、アイデンティティ研究など）、歴史学的分析（文献のコンテンツ分析、オーラル・ヒストリー）等で見ることができる。フィクション、写真、建築などもナラティブ分析の対象とする場合もあるが、小論では、インタビューによる「語り」の研究に限定して、概念の多義性、ナラティブに対する視座、研究手法、研究実践での注意点について整理したい。

(1) ナラティブの多義性について

ナラティブという概念は用いられ方も幅が広く、その定義は多義的で一枚岩ではない。ナラティブをストーリー（物語）と同義に用いることもあれば、複数の出来事を時間軸上に並べたものがナラティブで、それにプロット（筋立て）が加わったものをストーリーとみなすこともある（野口, 2009）。「語る」という行為と、行為の産物としての「物語」を同時に内包するという両義性を兼ね備えた用語であることがナラティブの捉え方に幅をもたせているともいえる（野口, 2009）。たとえば、話し手と聴き手の相互行為から生ずる意味の生成を重視するやまだ（2000）は、「二つ以上の出来事を結びつけて筋立てる行為」を「物語」の本質的な定義としている。「物語」は「語る」という営みによって変化し、動的で、完結することがない。また、ナラティブは限定的な意味で用いられているときと、より広義にとらえられているときがある点には留意する必要がある（能智, 2006）。前者は形式からナラティブを判別する場合、後者は「素材としてのナラティブ」で、たとえ構造的にはナラティブの要素を含んでいない発話であっても、その語られたことが語り手の主観的な世界を知る手がかりとして扱うことができれば、その語りはナラティブと呼ばれることになる。たとえば、後述する Labov（1972）は構成要素を軸としてナラティブを分析する。またフリック（2002）によれば、物語が完結するまで話す（完結性）、必要なことだけが話される（取捨選択性）、必要な背景情報／文脈が述べられる（文脈性）といった要素を兼ね備えたものがナラティブになるという。一方、Riessman（2008）は、ナラティブの特徴として、Phil Salmon の定義「ナラティブは、そのような形式をとらなければ、まとまりもなく、分断されてしまうような、意味をもったパターンのこと（筆者訳）」（p.5）をあげ、その定義に幅をもたせている。一見筋立てのないやり取りでも、背景知識や情報を共有する者のあいだでは意味をもちうるような場合は「素材としてのナラティブ」として扱えることとなる。いずれにしても、研究者はどのような意味でナラティブをとらえているのか意識しなくてはならない。能智（2006）はナラティブの多重性を指摘し、「思考としてのナラティブ（主観的世界）」「行為

としてのナラティブ（相互作用、言語の実践、働きかけ）「産物としてのナラティブ（パロール、発話、語り、意味付け）」「社会文化のなかのナラティブ（言説）」のどの部分を中心にして「ナラティブ」という用語を用いているのか、何を分析の対象としているのかを自覚する必要があると述べる。

このようにナラティブという概念に意味の広がりがあることは否めない。異なる分野で用いられていることが、ナラティブの定義を重層的にしているともいえる。ひとつの定義に収束することはできないが、ナラティブに対するアプローチには、(1) 語り手の主観的世界に注目する、(2) 現実と言語活動によって構築される、(3) 現実是一片岩ではなく複数の意味付けが同時に存在する、などについては共通理解があるように思われる。

(2) ナラティブに対する視座

「現実」とは何か（存在論）、どのようにして「現実」は「現実」となりえるのか（認識論）という問いは、ナラティブを理解する上で重要であろう。以下、ナラティブを取り上げる際に言及されることの多いブルーナー（1998）/ Bruner（1991, 2003）を中心に、ナラティブに対する視座について整理してみたい。

ブルーナー（1998）によると、我々は論理・科学的な「パラディグマティック（paradigmatic）な思考様式」（理論、分析、論理的証明、妥当な論議、理路整然とした仮説）だけではなく、個人的な記憶を選択し、結びつけるなかで、自己や他者を構成し理解しようとする「物語の様式」でも人生を生きているという。理解のレパートリーとしての既存ストーリー（他者と共有する過去の物語）は目に映る現象や体験に「型」を当てはめ、輪郭を与える作用をもたらす。そこで生じる意味によって、何が起きているのかを理解することとなるわけだが、同時に、「語り」という行為は経験を組織化し、自分なりの解釈を加えながら納得できる意味付けをしていく営みでもある。いわば、自分自身の「仮想テキスト」を「書く」ことを通して、ストーリーの題材を自分の理解のレパートリーと調和させようとする行為ととらえることもできよう。語る行為を通して、ことばは「語られた出来事」となり、あたかも「現実」として姿を現すことになるが、その「語る行為（telling）」と「語られたこと（told）」には既存のストーリーが分かち難く絡んでいて、そこには内面化された他者の声が常に存在している。したがって、「知る者（the knower）」と「知られる者（the known）」を明確に分離することは難しい。語られたストーリーは「実在するもの（real）」と「想像されたもの（imagined）」が混在する「存在論的なジレンマ」（ontological dilemma）（Bruner, 2003, p.22）を伴うこととなる。

ストーリーは「本当らしく」みえても、特定のパースペクティブから語られたものにすぎないと Bruner（2003）は言う。「そこ」ではなく「ここ」から話される必然性はどこにあるのか、それは文脈によっても変化する。どのような状況で、何を目的として、誰に向かって話すのかによって、内容や話し方も変わることは否めない。浅野（2001）は、自然／当たり前前に響く語りには語られないこと、残余が常に存在し、そこには「可能性の隠蔽」「矛盾の隠蔽」が潜むという。ナラティブとは既存のストーリーの範疇で承認されるバージョンの「現実」であり、立証や論理に裏付けられたものとはとらえられていない。このような把握のもとでは、話し手と聴き手とのあいだで意味のズレは避け難く、両者の意図と解釈が一致するというコミュニケーション観を前提としていない。つまり、現実とはさまざまに語られるものであり、その意味の世界は一樣でなく、時には矛盾した複数の現実が同時に存在しうることとなる。

上記からも明らかなように、ナラティブは、「語り」によって唯一の現実や普遍的真実が表象

されているのではなく、「語り」によって現実作り上げられるという認識論に依拠している。Bruner (1991) はテキストがどのように表現されるかということと、そのテキストがもたらす意味とのあいだにはズレがあり、「正しい」解釈を決定、保証する特別な方法などないという。ストーリーの一部は全体の中でのみその意味が想起される一方で、ストーリー全体は部分部分の連なりによって初めて体をなす。合理的あるいは実証的にナラティブが「真実」であるかを立証しようとするのではなく、部分が全体の中で適切に組み込まれ機能していると同時に全体が部分の総体として無理なく組み立てられ、一つのストーリーとして聴き手に受け入れられるかどうかという、いわゆる「解釈的循環 (hermeneutic circle)」(Bruner, 1991, p.7) によってナラティブの信憑性を判断することとなる。

自己についての語りには (1) 視点の二重性、(2) 時間的構造、(3) 他者への志向があると指摘する浅野 (2001) の論考はナラティブを通した現実の構成を考える上で示唆に富む。語り手である自分と語られる登場人物としての自分は原理的に同一ではありえず、完全に一致することは難しい。今の自分と、あの時の自分は同じ「私」でありながら、異なる場と時に置かれた存在であるという異質性を同時にもちあえるパラドックスをはらむからである。人は、物語の登場人物でありながら、同時にその物語を作者として作り出し続ける「受動性と能動性の二重性を帯びた存在」(小田, 2009) で、その語り手の二重の視点が語りの不確かさにつながる。過去を振り返って語るストーリーであれば、何がしかの結論あるいは結果がすでに判明しているわけで、そこを起点としたストーリーの(再)構成、それに対する評価コメントも入り込まざるをえない⁴。また、語り手が聴き手を想定して初めて成り立つものである以上、話される相手、すなわち他者の存在は極めて重要となる⁵。複数の現実が闘ぎあうナラティブの意味世界では、語った事が信憑性をもち、「現実」として構成されるためには、聴き手である他者によって受け入れられ、裏打ちされる必要がある。聴き手が納得できるよう話し方が選択され、内容に修正変更が加えられる可能性は当然出てこよう。

(3) 分析手法

コミュニケーションをナラティブの概念からとらえ、ナラティブ・パラダイム⁶を提唱したFisher (1985) は、テキストを批判的に読み込むこと以外にナラティブの分析に確たる方法はないと論じる。独自の分析方法はないが、インタビューの手法をとる場合、基本的には、聞き取り→トランスクリプション→構造と内容の分析という手続きを踏む。ただ、これらのステップを順次実行するというのではなく、書き起こし作業を進めながら解釈し、解釈と同時に分析を行うという、データ収集と分析が一体化している点が特徴としてあげられる。

参考までに、具体的な分析方法として Riessman (2008) が紹介する三つのアプローチをまとめる。

(a) テーマ分析 (Thematic Analysis) : 個別事例にみられる主観的意味の世界を理解することを目的とし、それに関わるカテゴリーを(筋の読み込みから展開してくるテーマ)抽出する。主眼はあくまでも語られた内容 (told) であって、語る行為 (telling) ではない。聴き手(調査者)とのインターアクションにおいて特定の語彙の使用や意味変化を見ようとするものでもない。したがって、データの書き起こしには、非言語を含む詳細な記述は必要なく、一つのまとまりのあるストーリーが伝わるよう整理された「語り」が提示される。グラウンデッド・セオリー・アプローチ(以下、GTA)と混同されることがあるが、GTAが複数の事例に共通するコアとなる概念を抽出し仮説を生成することが目的であるのに対し、ナラティブ分析は一つひとつの事例にみ

られる個別の主観的世界に注視する点が大きく異なる。極めて個別的で局所的ともみえるナラティブが広がりをもちうる可能性もあるが、必ずしもそれを保証するわけではない。また、データの扱い方においても、一般的にGTAではデータを切片化し（流派によって考えかたの違いはあるが）、コード化・カテゴリー化するが、ナラティブ分析ではテキストの流れ・シークエンスを重視するといった違いがある。

(b) 構造分析 (Structural Analysis)：基本的に、内容 (told) ではなくナラティブの形式 (telling)、すなわち、どのように話されたかに主眼があり、語りの構成要素と配列をみようとするアプローチ。具体的な分析方法としてLabov (1972) の構造分析がある。Labovはストーリーの基本的構成要素として、概要 (abstract)、場面設定 (orientation)、展開 (complicating action)、評価 (evaluation)、結果 (resolution)、締めくくり (coda) があるとした。テーマが同じでも、人によってその話の流れ、形式が同じとは限らない。それらの要素がどのような順序で発話を構成しているかを注視し、どのように構造が異なるのか比較参照することで、強調点の違いや、どのような意味を語りに付与しようとしているのかという考察も可能となる。音韻的特徴 (ピッチ、イントネーション、間などのマーカー) を手がかりに意味のまとまり (スタンザ) を組織化しようとするGee (1991) のアプローチもある⁷。一度の発話が非常に長い上、脈絡がつかみにくいなど、一見すると意味をなさない語りの分析に用いられる。いずれにしても、関心は発話のローカルな構成にあり、話し手と聴き手の関係性や社会的コンテキスト (制度、権力、文化など) が語りに与える影響をあぶり出そうとするものではない。

(c) 対話分析 (Dialogic Analysis)：話し手と聴き手の相互作用から紡がれる意味の生成過程をみる。一つのことばの背後に響く、歴史的背景、権力構造など話し手すら気づいていないさまざまな「声」を読み解こうとする。個別の事例を扱いながら、何について、どのような表現を選び、どうつなぎ合わせているのか、ひとつの表現がどのような背景、文脈に呼応して使い分けられているのか等を通して、語り手の主観的世界やアイデンティティを理解することに主眼が置かれる。解釈の過程では、「何が」(内容)「どのように」(非言語を含む形式)だけでなく、誰が、誰に向かって、なぜそのように話されたのかといったコンテキストを加味することが重要となる。やまだ (2000) は、「今・ここ」の話し手と聴き手の共同作業の現場だけでなく、さらに大きい文化・社会的文脈、歴史的な文脈、生態的文脈にも留意する必要があると指摘する。私たちは、さまざまに重層的な文脈に埋め込まれて生きており、その中で支配的語り、マスター・ナラティブに慣らされてもいるからである。対話分析では、聴き手である調査者がどのように相互作用に関わっているのかという点がとくに重要となる。トランスクリプションには聴き手と話し手が含まれ、民族誌的記述 (ライフストーリーなど) や会話分析的手法が用いられる。

程度の差はあるものの、「何が語られたか」(内容)に関心があるテーマ分析では細かな言語的特徴 (イントネーションや間・沈黙など) は重視しなくてもよいが、「どのように語られたか」(会話の構造や形式) を見ようとする構造分析、あるいは聴き手との「相互作用」(意味の形成) に関心がある対話分析では、会話分析的手法をとることが多い。ただ、実際にはこのような三つのアプローチを明確に区別することは難しく、それぞれの特徴を研究の目的に応じて組み合わせるなど、(たとえば、テーマ分析の形をとりながら、語彙の意味変化にも注視するなど) かなり柔軟な姿勢がみられる。

ナラティブの概念を用いた異文化コミュニケーション研究は日本ではあまりみられない。参考までに、「中国人であること」「日本人であること」がどのような文脈で語られ、同時に自らのアイデンティティを構築しているのか、その流動性を浮き彫りにした船山 (2003)、日本人留学

生のアイデンティティの変容を構築物である「物語」の視点で読み解いた花井（2008）、「ボランティア」「プロ」「アマ」といったことばを鍵として医療通訳者の微妙な立ち位置に注目した灘光（2011）をあげておく。

(4) 注意点

ナラティブ分析はゲシュタルトを維持しながら、テキストの流れや形式、さらには文脈を通して、語り手のメッセージを汲み取ろうとするシークエンス分析といえよう（伊藤・能智・田中，2005）。目的は、包括的な説明の提示や仮説の生成にはなく、偶発的にみえる出来事からマクロな視座につながる理論的要素を提供することにあるといつてよい。語りは本人の世界を表す手がかりとなると同時に、語り手が気づかない世界を垣間見せてくれることもある。一般化を保証するものではないが、個別のケースについて「納得」「理解」を得るための知見を提供できることが強みといえよう。話し手がコミットできるような特定のテーマや体験、アイデンティティなどを題材とした主観的意味世界を探求しようとする研究に適している。独自性に富み、逸脱しているかのようにみえる事例に潜む内的世界をみようとする場合に用いてもよいだろう。

ナラティブ分析で留意する点としては、まず研究者自身の視座に自覚的であることがあげられる。また、唯一の正しい「現実」を反映した語りはありえない。そのような話し手の主観的世界を、聴き手であり同時に解釈者でもある「私」（研究者）が分析し記述することになるわけで、解釈の主体である自己への振り返りを怠らない姿勢が求められる。

つぎに、分析の説得性を高めることが要求されよう。解釈の信憑性や説得性が問われるナラティブ研究では、単なるデータの羅列や暗黙の前提の域をでない研究結果であれば、研究者の主観に基づいたご都合主義と批判される向きもでてくる。そのような誹りを回避するためにも、語りの関与者である研究者自身の視座や着目点、聴き手との関係性、データ収集の状況や分析の手順などを明記することが重要となろう。他の資料（参与観察のフィールドノートなど）が参考になることもある。ナラティブを通して何が知りたいのかを意識し、それに適した分析手法を選び、時には併用することで分析の精度を高めることが大切であることは言うまでもない。

4. アクションリサーチ

アクションリサーチは、研究者がフィールドの人々に寄り添い、共同で作業を行うことで、フィールドそのものを変化させそれを記述する研究である。本項ではアクションリサーチの定義と起源、理論的背景と種類、実際の進め方、異文化コミュニケーション関連領域におけるアクションリサーチの例と今後の方向性について考えていく。

(1) アクションリサーチの定義と起源

研究には、研究者の立ち位置によって、二つのタイプがある。一つは、観察者という立場から、フィールドで生起していることをそのまま記述・分析し、対象をあるがままの姿で変えないように配慮する。もう一つは、介入者という立場から、フィールドの人々に寄り添い、共同で作業を行うことでフィールドに対して何らかのアクションを起こし、その変化をみようとする。フィールドの現状をどう改善できるかが中心的課題となる。Reason & Bradbury（2008）は、アクションリサーチを、「人々がコミュニティや組織において何らかの重要な問題の改善を目的として共に取り組むところに生まれる」（p.1）としている。

アクションリサーチの起源や種類は多様である。Reason & Bradbury (2008) は、第二次世界大戦後の組織の研究者クルト・レヴィンと、1970年代のブラジルの識字教育の教育実践家のパウロ・フレイレを起源としてあげている。箕浦 (2009) はこれらに加え、19世紀末に実験学校を建てたデューイを系譜の一つとみなしている。

アクションリサーチということばは、クルト・レヴィンの、1946年の「アクションリサーチとマイノリティの諸問題 (Action research and minority problems)」という論文の中で初めて使われた。レヴィンは、心理学者の社会の問題への無関心さを批判し、社会問題を解決するための研究のあり方としてアクションリサーチを提唱した。彼は、社会心理学の集団・組織の研究では一般法則を導き出す実証的研究が多かったが、組織の特徴を理解した上で、何らかのアクションを起こしグループ間関係を改善していく研究が重要であると主張した (Lewin, 1946)。論文や著書を書くための研究だけでは十分でないとし、実際に社会に役立つ研究を目指した。したがって、研究法はアンケート調査だけでなく、フィールド調査を行い、心理学、社会学、文化人類学等の学問領域にとらわれず、現象を網羅的に把握する必要を説いた。

レヴィンが「アクションリサーチとマイノリティの諸問題」の論文でとりあげた事例は、コネティカット州の人種的少数派の問題を取り扱う異文化トレーニングである。コネティカット州人種関係委員会のリーダーは、スタッフ50人のためにグループ間での差別をなくすためのスキルを改善することを目的としたワークショップを実施するようレヴィンに依頼した。ステレオタイプは文化的規範に根差しているため、マイノリティの問題に直接関わるスタッフにはワークショップ形式が最適だという考えに基づいてのことである。このワークショップから、スタッフの改善を阻む障壁にはマイノリティグループの自尊感情の低さも関係しており、彼らの自信のなさが行動の無力さを引き起こしていることがわかった。マジョリティグループの思い上がった自己評価を下げるだけでなく、マイノリティグループの自己評価を上げることの必要性も明らかになったといえる (Lewin, 1946)。また、論文では、良いワークショップを受講しても、コミュニティに帰ればうまくいかないという持続性の問題も指摘されている。アクションリサーチの起源に異文化コミュニケーショントレーニングがあったことは、異文化コミュニケーション領域におけるアクションリサーチの有用性を再確認することにつながる。

(2) アクションリサーチの理論的背景と種類

時代や分野を超えて、アクションリサーチの多様性をとらえようとするときに、その背景となる理論や哲学を考えると整理しやすい。一つは、研究者の認識論に関わるもの（「客観的認識論」か「主観的認識論」か）であり、もう一つは、研究者の現場への関わり方（「合理的管理」か「構造変化」か）である。「客観的認識論」は、研究者が客観的な社会的現実が存在しているという前提に立ち、実験や調査など、科学的で論理的な手法に従えば、客観的に現実をとらえることができるという認識論である。それに対するのは「主観的認識論」で、現実はいずれの頭の中にある主観的なものであり、主体が誰で、どのような状況に置かれているかで現実の見え方は変わるという認識論である。いわゆる社会構築主義の考え方で、真実が存在するという「客観的認識論」や論理実証主義のアプローチとは異なる認識論である。どちらの認識論が正しいというわけではなく、研究者はどの認識論に立って研究しているかを意識しておく必要がある。

研究者の現場への関わり方には、組織の「合理的管理」を目指すか、「構造変化」を目指すかの方向性がある。「合理的管理」とは、現場で無駄をなくし効率や健全さを至上目的とする科学的管理法⁸に近く、研究者が改革案を出す。それに対し「構造変化」とは、現場での問題や葛藤

を、研究者が現場の担当者と共に見出し、現状を改革し変化させようとする。研究者は実践者や担当者、また、組織やコミュニティの中で力をもたない少数者の声を反映させようとする。研究者の「認識論」と「現場への関わり方」を二軸に置くと、図1のようにアクションリサーチの種類が分類できる。

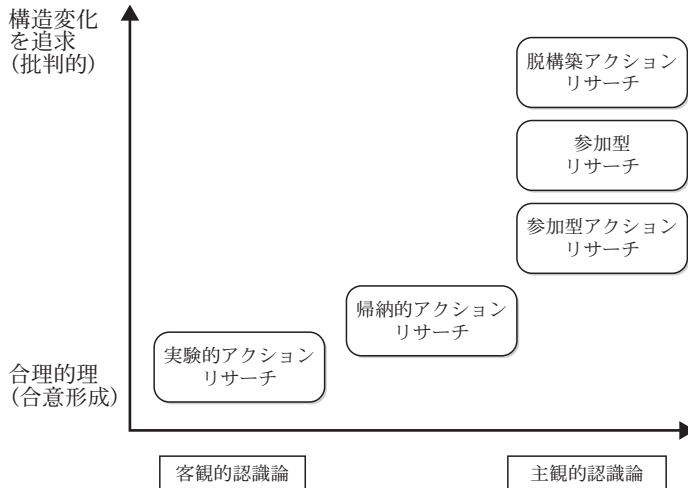


図1 アクションリサーチの分類

(Cassel & Johnson, 2006 を参考に著者が分類)

レヴィンのアクションリサーチは、客観的認識主義に立脚した「実験的アクションリサーチ」に分類される。実験室ではなくフィールドで実験を行い、実験の前後にプリテスト・ポストテストで効果を測定する。組織への介入は、あくまでも研究者が中心となって組織の合理的管理を目指す。アカデミックな心理学では主流とはならなかったが、現在も経営や組織分野で活かされている。タビストック人間関係研究所 (Tavistock Institute of Human Relations) はレヴィンの伝統を引き継ぎつつ、研究活動や公的機関・企業向けのコンサルテーションを行っている。

より自然な組織的文脈の中で帰納的にデータ収集をし、解釈的なグラウンデッド・セオリーを用いて介入するのが「帰納的アクションリサーチ」である。研究者と組織の研究参加者によって問題を分析し、介入していく。内省的学習の反復のプロセスを通して問題意識を発展させていく。アクションリサーチャーの役割は、冷静なる専門家というより、組織における文化的現象に接近し、人々の営みを内省する一人の参加者である。

「参加型アクションリサーチ」は、「参加型 (participatory)」ということばが使われているように、調査対象の人々がリサーチの最初のデザインから問題検討、対策立案まで全過程に積極的に関わり、研究者の役割は、専門家というより、問題解決を可能にする相談者としての役割をとる。「参加型アクションリサーチ」と「参加型リサーチ」の大きな違いは、前者が組織や企業の上層部と協力する形態をとることである (Park, 1999)。参加対象者は組織の上層部や知識・権威をもった専門家に制限され、「エキスパート (専門家) リサーチ」と呼ばれることもある。

「参加型リサーチ」は、参加が上層部に限られる「参加型アクションリサーチ」と異なり、「共同体の全体のニーズを提出していく」 (Park, 1999)。すなわち、組織で沈黙させられている個人や集団に、アクションリサーチを通して、声を出させることでエンパワーし⁹、組織を改善し

ていこうとする。組織に対しより民主的で批判的な志向が強い。同時に、このアクションリサーチを行うためには、組織や共同体一人一人の意識的な自己決定が必要になる。フレイレは、識字教育を実践する中で「解放のために闘わなければならないという被抑圧者の確信は、革命的指導によって授けられる贈物ではなく、被抑圧者自身の意識化の成果である」（1970, p.59）と述べている。「参加型リサーチ」では、共同体に参加する一人一人に内省と批判的思考と決断をする力が求められる。

「脱構築的アクションリサーチ」は、ポストモダニズムの立場にたち、最も現実に対し批判的である。言語に力をもたせるポストモダニストは、現実を言語により記述するのではなく、言語が現実を構築すると考えている。組織内で民主的に合意された言説や意味が作られる過程には、常に他の言説と意味の消滅がある。一つの意味に固定されず、多様性を認め、常にオルタナティブな意味を見出そうとする緊張と闘いが組織を活性化し改良を可能にするという。脱構築的アクションリサーチは、「問題への答えを探すのではなく答えを問題視すること」（Cooper & Burrell, 1988, p.107）で、自身や他者の考えをとらえ直し、当たり前と知っていることに疑問を呈することで人々を助ける方法である。

（3）アクションリサーチの実際

上記に述べたように、アクションリサーチは多様であるが、その実施過程は共通しており、図2に示すように「状況把握」、「計画立案」、「実施」、そして「評価」のステップがある。「状況把握」では、フィールドでの現場の人々への聞き取りや観察から、現場で何が問題なのかを把握する。「計画立案」では現場の状況やタイミングを考え実践可能な行動をいつ、どこで、誰が、どのように行うか時間軸に沿って計画を立てる。「実施」では、計画に沿って実際に行動する。重要なのは実践中も、その計画が実際に行われているか現場での状況や変化をモニターし記録することである。そして「評価」では、記録データをもとに、現場の問題に対し対策はどう実施され、問題はどうか解決されているのか、批判的に分析し評価する。さらに、評価の段階で変化した状況をとらえ、さらに「状況把握」へと再び戻ってこのステップが繰り返されることから、このプロセスは螺旋状に続くことになる。しかし、現場に研究者がどのような立場で、現場の誰と、どのように関わるかによって、今どのステップなのかは必ずしも明確ではない。企業にコンサルタントの立場で入る場合には比較的明確であるが、研究者として学校現場などでフィールドに入る場合、現場での立場や関わり方も常に変化し、必ずしも明確ではない。したがって常に研究者の内省が求められる。

ここでは、異文化コミュニケーション領域で行われたアクションリサーチやそれに類する研究を具体例として取り上げ、その傾向を分析し、今後の課題を検討したい。たとえば、留学前後に日本人大学生や外国人留学生のイメージがどのように変化したか（葛, 2003; 末田, 2001）、また、日本人と留学生の合同授業や交流プログラムによって相互イメージがどうか変化したか（加賀美, 2006; 箕浦 1998; 鈴木, 2004; 横須賀, 2004）など教育の取り組みとしての研究があげられる。しかし、これらの研究では、研究者と現場の研究協力者との関わりの中で問題点を見出し、計画立案、実施が行われているわけではない。国際協力分野の久保田（1998）は、フィリピンにおける NGO 活動により、貧困者や女性がどのようにエンパワーされたかを、聞き取りと観察から分析した。ここでは、アクションの主体は研究者を含む NGO であり、NGO の活動に参加した現地のフィリピン人たちがどのようにエンパワーされたかその具体的な意味を、活動への非参加者と比較しながら検討した。アクションを実施する過程より、実施後の効果に重点が置

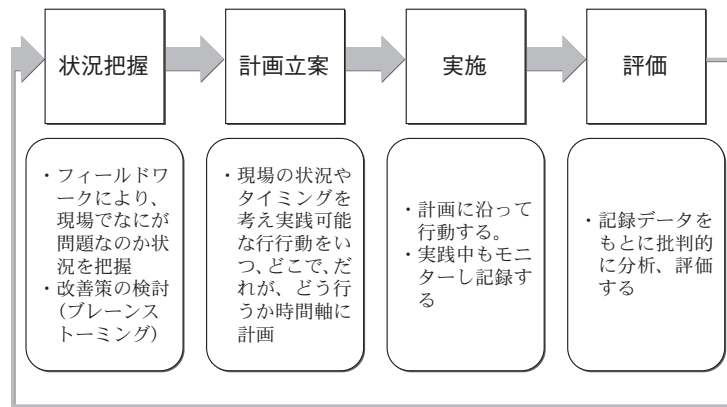


図2 アクションリサーチの実際

かれた研究である。また、清水（2006）の研究は、アクションリサーチを最初から意図していたわけではないが、ニューカマーの子どもたちの学校と家庭での日常生活に、7年間ボランティアとして関わっていく中、現場が変わった過程を記述している。清水は研究者として学校の教員から意見を求められ、フィールドワークから得られた知見を伝えることがあったが、そのような教員との対話のやりとりの中で、現場の教員の意識が変化していった。その結果、教師や生徒たちとの関係性が変わり、学校や地域のコンテキストが変化し、不登校ぎみの外国人生徒が自らのエスニシティに肯定感を感じられるようになり学校に来るようになった。長期にわたるフィールドワークにおいて、現場との関係性が変化し、アクションリサーチに結びついた例である。

(4) 今後の方向性

アクションリサーチの魅力は何であろうか。それは、研究者が研究のための研究という目的に終わるだけでなく、研究者として現場の人々とは異なる立場から観察し、現場と対話し関わりながら、問題への洞察を深め、改善することを可能にすることであろう。アクションリサーチの始めはレヴィンらによる異文化トレーニングであったことを思い起こせば、異文化コミュニケーション分野は、民族や文化といった異なる個人や集団の問題を扱ってきた経緯から、現場との共同作業によるアクションリサーチの可能性を多く秘めている。学校現場、職場や地域における、文化的にマイノリティの人々やマジョリティの人々の意識改善、コミュニケーション能力や多文化関係能力の改善など多岐にわたる。これまでも教育現場では授業の取り組みによる受講者の意識変化が認められてきたが、当事者を巻き込みながら、当事者と共に問題を発見し、対策を立てていく試みをすることで、研究の現場が客体として解決を待っている場ではなく、当事者がエンパワーされ、主体的に働きかけ改善していくことができる場となっていくと考えられる。

アクションリサーチの難しさは、科学的な研究としての疑問が付されることである。論理実証主義の認識論に立つ研究では、研究者は研究対象をあくまでも客観的に観察し因果関係を導き出すことを目的とするため、研究者の現場との関わり方や現場の複雑な変化を数値化できないアクションリサーチは、科学的でないと言われる。アクションリサーチに限らないが、どの研究も研究者がどのような位置に立ち、どのような方法をとるのかその認識論、方法論を明らかにしていく必要がある。もう一つアクションリサーチを難しくしているのは、求められる能力の問題と手間であろう。アクションリサーチでは、現場の人と対話し、ともに考え、行動していくために、高

い共感力やコミュニケーション能力が求められる。そのためには、現場における自身の影響力を認識し、次の行動を考えるために、自覚的な内省が求められる。アクションリサーチでは、研究者の内省とアクションの判断プロセスそのものが研究の記述内容になっていく (Kristiansen & Bloch-Poulsen, 2008)。アクションリサーチを行う研究者には、現場に対し慎重でありつつ恐れず、内省を深めつつ現場に積極的に関わっていく、謙虚さと勇気のバランスが求められる。

5. おわりに

取り上げた GTA、ナラティブ分析、アクションリサーチは質的研究方法として、普遍的真理や現実を前提としない、人の内面的世界をみようとするなどの共通点がある一方で、それぞれ主眼の置き方は異なる。原則的に、GTAは仮説生成を目的としているのに対し、ナラティブ分析は個別の主観的意味世界を読み解こうとする。アクションリサーチは研究者が現場に関わり、現状の改革を目指す。また、分析手法も一枚岩ではない。GATには大きく三つの流派があり、実証主義の色合いの濃いオリジナル版ではデータの細かい切片化を行うが、社会構成主義版では研究者の解釈が前面に出た分析となる。M-GTA版は分析ワークシートを導入するなど概念抽出の手順をより体系化するなどの特徴がみられる。ナラティブ分析では、どのレベルでナラティブという概念をとらえるか、ナラティブを通して何を知りたいのかによってトランスクリプションの記述方法も分析のアプローチも異なる。分析の対象がテーマ(内容)なのか、構造なのか、相互作用による意味の生成(プロセス)なのかを意識する必要がある。アクションリサーチでは、「状況把握」「計画立案」「実施」「評価」という調査手順は同じだが、研究者の現場への働きかけや影響力には差があり、一口にアクションリサーチといっても、その形態には多様性がみられる。

以上で明らかのように、各研究方法に異なるヴァージョンがあり(その区分には曖昧さも伴うが)、実践方法も一様ではないことには充分注意を払う必要がある。自分の関心の対象は何なのか、リサーチクエスチョンは何かによって、どの方法が一番適しているのかを判断することになる。また、依拠する理論的枠組みへの理解、研究者の立ち位置に内省的であることは、これら質的分析には欠かせない。小論が、異文化コミュニケーション研究に質的方法を用いることを考えている大学院生および若手研究者のために、導入的役割を果たすことができれば幸いである。

註

- 1 おもな執筆担当は、灘光(ナラティブ分析、はじめに、おわりに)、浅井(アクションリサーチ)、小柳(グラウンディド・セオリー・アプローチ)である。
- 2 社会的な相互作用の中に意味が生まれ、それに対する意味解釈に基づき人間は行動すると考える。
- 3 対象者がどのようになぜ意味や行為を構築するのかを研究し、そこからの理論も研究者の見方による構成物と考える。
- 4 このことは、語りは「物語世界」(出来事の記述)と「ストーリー領域」(評価、本人がそのことをどう思っているか)から構成されているとする桜井(2006)の知見に通ずる。
- 5 Bruner(2003)は自分が見たい自己の姿は暗黙の文化的モデル(文化的ナラティブといってもよいかもしれない)に影響され、自己を構成したナラティブは同時に他者の視点を取り込んだ「公的自己ナラティブ構成(public self-telling)」でもあると述べている。
- 6 人はストーリー・テラーであり、明確な論理や構造、合理性だけでなく、ナラティブとして人生を理

- 解しているという存在論に基づく。Fisher (1984, 1987) は、合理的パラダイムでは、論理性や知識に富む一部のエリート層に操られる傾向にあるが、ナラティブ・パラダイムの考え方では、「良い理由 (good reason)」を見抜くための価値判断能力と思考力は誰でもがもちうる」と論じる。ストーリーの善し悪しを判断する基準は一貫性 (narrative probability) と迫真性 (narrative fidelity) にあり、人はそれらをもとに瞬に落ちるストーリーを選び取る力があるという。また、人が説得されるのは論理的な討議を通してだけでなく、話し手と聴き手の一体化 (identification) によってもなされるとする。
- 7 Gee が用いる英語の音韻的特徴をそのまま非英語テキストの分析に応用するには注意を要する。
 - 8 科学的管理法は、産業革命後の大量生産を行う工場での製品管理、労働者管理など組織マネジメントに科学的な方法を適用しようとする理論。19世紀のカール・マルクスの思想の影響を受けている。アメリカのテイラー (Frederick Winslow Taylor) やファヨール (Henri Fayol) らが代表的な理論家である。
 - 9 パーカー (2008) は、エンパワーメントについてのいくつかのタイプをあげている。「手助け (helping)」とは、研究者が、人々に対し自分で何か研究できるように援助を行うことである。「先兵 (vanguard)」の役割においては、研究者は被抑圧者の先頭に立ち、被抑圧者たちの主張を擁護すべく抑圧者と対峙する。「活性化 (enabling)」においては、研究者は共同研究者たちの活動を特定の方向に導くわけではないが、研究活動を通して、今までにない何らかの動きを起こす。

参考文献

- 浅野智彦 (2001). 『自己への物語理論的接近：家庭療法から社会学へ』 勁草書房.
- ブルーナー, J. (1998). 『可能世界の心理』 (田中一郎・訳). みすず書房. [原著: Bruner, J. (1986). *Actual minds, possible worlds*. Cambridge, MA: Harvard University Press].
- Bruner, J. (1991). The narrative construction of reality. *Critical Inquiry*, 18, 1-21.
- Bruner, J. (2003). *Making stories: Law, literature, life*. Cambridge: Harvard University Press.
- Cassel, C., & Johnson, P. (2006). Action research: Explaining the diversity. *Human Relations*, 59 (6), 783-814.
- シャーマズ, K. (2008). 『グラウンデッド・セオリーの構築：社会構成主義からの挑戦』 (抱井尚子・末田清子・監訳). ナカニシヤ出版. [原著: Charmaz, K. (2006). *Constructing grounded theory: A practical guide through qualitative analysis*. London: Sage].
- Cooper, R., & Burrell, G. (1988). Modernism, postmodernism, and organizational analysis: An introduction. *Organization Studies*, 9, 91-112.
- Fisher, W. R. (1984). Narration as a human communication paradigm: The case of public moral argument. *Communication Monographs*, 51, 1-22.
- Fisher, W. R. (1985). The narrative paradigm: An elaboration. *Communication Monographs*, 52, 347-367.
- Fisher, W. R. (1987). *Human communication as narration: Toward a philosophy of reason, value, and action*. Columbia, SC: University of South Carolina Press.
- フリック, U. (2002). 『質的研究入門—人間の科学>のための方法論—』 (小田博志・山本則子・春日常・宮地尚子・訳). 春秋社. [原著: Flick, U. (1995). *Qualitative Forschung*. Reinbek bei Hamburg: Rowohlt Taschenbuch Verlag].
- フレイレ, P. (1979). 『被抑圧者の教育学』 (小沢有作・楠原彰・柿沼秀雄・伊藤周・訳). 亜紀書房. [原著: Freire, P. (1970). *Pedagogia do oprimido*. Rio de Janeiro: Paz e Terra].
- 船山和泉 (2003). 「異文化間経験の場で構築される『中国 (人) 的であること』と『日本 (人) 的であること』の意味の多重性: 日中合弁会社における事例」『Human Communication Studies』第31号, 145-165頁.
- ガーゲン, K. J. (2004). 『あなたへの社会構成主義』 (東村知子・訳). ナカニシヤ出版. [原著: Gergen, K. J. (1999). *An invitation to social construction*. London: Sage].
- Gee, J. P. (1991). A linguistic approach to narrative. *Journal of Narrative and Life History/Narrative Inquiry*, 1, 15-39.
- Glaser, B. G., & Strauss, A. L. (1967). *The discovery of grounded theory: Strategies for qualitative research*. Chicago: Aldine Publishing Company.

- 花井亨 (2008). 「物語が織り成すアイデンティティと文化：アメリカ中西部の大学院における異文化体験についての民族誌的省察」『*Human Communication Studies*』第 36 号, 51-72 頁.
- 伊藤哲司・能智正博・田中共子 (編) (2005). 『動きながら識る、関わりながら考える：心理学における質的研究の実践』ナカニシヤ出版.
- 加賀美常美代 (2006). 「異文化シミュレーションゲームと協働的活動」『*異文化間教育*』第 23 号, 76-911 頁.
- 葛文綺 (2004). 「留学前後における対ホスト国イメージの変化に関する研究—中国人留学生と日本人留学生との比較を通して」『*異文化コミュニケーション*』第 7 号, 117-130 頁.
- 木下康仁 (1999). 『グラウンデッド・セオリー・アプローチ—質的実証研究の再生』弘文堂.
- 木下康仁 (2003). 『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践：質的研究への誘い』弘文堂.
- Kristiansen, M., & Bloch-Poulsen, J. (2008). Working with 'not knowing' amid power dynamics among managers: From faultfinding and exclusion towards co-learning and inclusion. In P. Reason & H. Bradbury (Eds.), *The SAGE handbook of action research: Participative inquiry and practice* (pp.463-472). Los Angeles: Sage.
- 久保田真弓 (1998). 「エンパワメントにみる『力』—フィリピンでの NGO 活動と貧困女性の事例から—」『*異文化コミュニケーション*』第 2 号, 53-751 頁.
- Labov, W. (1972). *Language in the inner city: Studies in the black English vernacular*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Lewin, K. (1946). Action research and minority problems, *Journal of Social Issues*, 2, 34-46.
- 箕浦康子 (1998). 「日本人学生と留学生：相互理解のためのアクション・リサーチ」(平成 7 年度～平成 9 年度科学研究費補助金基盤研究 (B) (1) 研究成果報告書).
- 箕浦康子 (2009). 『フィールドワークの技法と実際 II』ミネルヴァ書房.
- 灘光洋子 (2011). 「通訳者のアンビバレントな立ち位置について—インタビューをもとに」成蹊大学文学部学会 (編) 『*異言語と出会う、異文化と出会う*』(3-46 頁). 風間書房.
- 野口裕二 (2009). 「ナラティブ・アプローチの展開」野口裕二 (編) 『*ナラティブ・アプローチ*』(1-25 頁). 勁草書房.
- 能智正博 (2006). 「語り」と「ナラティブ」のあいだ 能智正博 (編) 『<語り>と出会う：質的研究の新たな展開に向けて』(11-72 頁). ミネルヴァ書房.
- 小田博司 (2009). 「エスノグラフィとナラティブ」野口裕二 (編) (2009). 『*ナラティブ・アプローチ*』(27-52 頁). 勁草書房.
- Park, P. (1999). People, knowledge, and change in participatory research. *Management Learning*, 30 (2), 141-157.
- パーカー, I. (2008). 『ラディカル質的心理学：アクションリサーチ入門』(ハツ塚一郎・訳). ナカニシヤ出版. [原著：Parker, I. (2004). *Qualitative psychology: Introducing radical research*. Buckingham: Open University Press].
- Reason, P., & Bradbury, H. (2008). *The SAGE handbook of action research: Participative inquiry and practice*. Los Angeles: Sage.
- Riessman, C. K. (2008). *Narrative methods for the human sciences*. Thousand Oaks, CA: Sage.
- 戈木クレイグヒル滋子 (2008). 『実践グラウンデッド・セオリー・アプローチ：現象をとらえる』新曜社.
- 西條剛央 (2007). 『ライブ講義・質的研究とは何か—SCQRM (スクラム) ベーシック編—研究の着想からデータ収集、分析、モデル構築まで』新曜社.
- 桜井厚 (2006). 「ライフストーリーの社会的文脈」能智正博 (編). 『<語り>と出会う：質的研究の新たな展開に向けて』(73-116 頁). ミネルヴァ書房.
- 佐藤郁哉 (2008). 『質的データ分析法—原理・方法・実践』新曜社.
- 清水睦美 (2006). 『ニューカマーの子どもたち：学校と家族の狭の日常世界』勁草書房.
- Strauss, A. L., & Corbin, J. (1990). *Basics of qualitative research: Grounded theory procedures and techniques*. Newbury Park, CA: Sage.
- 末田清子 (2001). 「留学体験の意味づけ—大学生の留学前及び留学後の滞在国に対するイメージ分析を通して—」『*異文化コミュニケーション*』第 5 号, 57-74 頁.
- 鈴木有香 (2004). 「コンフリクトリゾレーションを導入した『異文化コミュニケーション授業』の可能性—日本人学生と留学生の学びの比較から—」『*異文化間教育*』第 20 号, 77-89 頁.
- やまだようこ (2000). 「人生を物語るの意味」やまだようこ (編) 『*人生を物語る：生成のライフストーリー*』(1-38 頁). ミネルヴァ書房.

横須賀柳子 (2004). 「日本人大学生とアジア系留学生の相互イメージ変容」『異文化コミュニケーション』
第 8 号, 159-176 頁.